

京都市伏見区深草「仁明陵北側地点」出土埴輪の検討

－「仁明陵北古墳」と「深草瓦町古墳」－

辻川 哲朗

1. はじめに

同志社大学歴史資料館には「深草遺跡」出土とされる埴輪資料（以下、本資料）が収蔵されている¹⁾。本資料は、後述のとおり、1958・1960年に実施された名神高速道路建設に伴う事前調査として、酒詰仲男氏（当時同志社大学教授）が担当した「仁明陵北側地点」（酒詰1960）における発掘調査で出土したものである。残念なことに当該調査の正式報告書は未刊であり、概報・略報（酒詰他1959・1960、波多野1960）の記述も限定されていたため、その実態がひろく正確に共有されたとはいえない。また、市街化の進行が迅速であったこともあって、当該地域をふくむ山城盆地東部～東南部の古墳時代関連資料は十分とはいいがたい状況にもある（宇野2009等）。

筆者は本資料を実見する機会をえた。その結果、本資料は遺構との関係を確定しがたい資料ではあるものの、一定の一括性をそなえた資料群であり、当該地域の古墳動向等にたいする従来の認識に付言しうる点があることがわかった。そして、その内容を提示することは、当該地域の古墳時代を検討するうえで、多少なりとも益するところがあるのではとかんがえるにいたった。

よって、本稿の主たる目的は、本資料の内容を報告し、当該地域の地域史復元に資することにある。以下、まず本資料出土の契機となった当該発掘調査の内容を確認したうえで（2章）、本資料の内容を報告し（3章）、それにもとづいて派生する課題－帰属先にかんする従来の認識がもつ課題と、本資料が当該地域の古墳動向において有する意味－について検討する（4章）。

2. 名神高速道路建設に伴う発掘調査の概要－1958・1960年調査－（図1・2）

本章では、本資料出土の契機となった1960年調査をたどり、出土経緯・状況を確認する。なお、本資料はおもに1960年調査で出土している。しかし、後述するように1958年にも少数の埴輪が出土していることにくわえて、両年度の調査はその経緯や内容からみて一連の調査であるとかんがえる。よって、本章では両年ともにあつかうことにした。

1958年の調査 名神高速道路建設に先だち、路線内の遺跡を対象とした事前発掘調査が実施された。京都市域で実施された数か所の調査地のなかに深草地域の遺跡もふくまれており、その一つが「仁明陵付近発掘区」であった。当該調査については、概要報告書（酒詰1959、以下「概要報告」）が刊行されている。それによると、調査地点の選定には、文献史料や採集遺物にもとづいて近辺に想定されていた平安期寺院－貞観寺址・嘉祥寺址の所在を探索することが主目的とされたことがわかる（図1－④・⑤）。くわえて、近世以来一帯では古墳関連遺物の出土が記録・伝承され、出土遺物の一部も伝世されており、これらの遺物が出土した古墳の探索も目論まれていた。

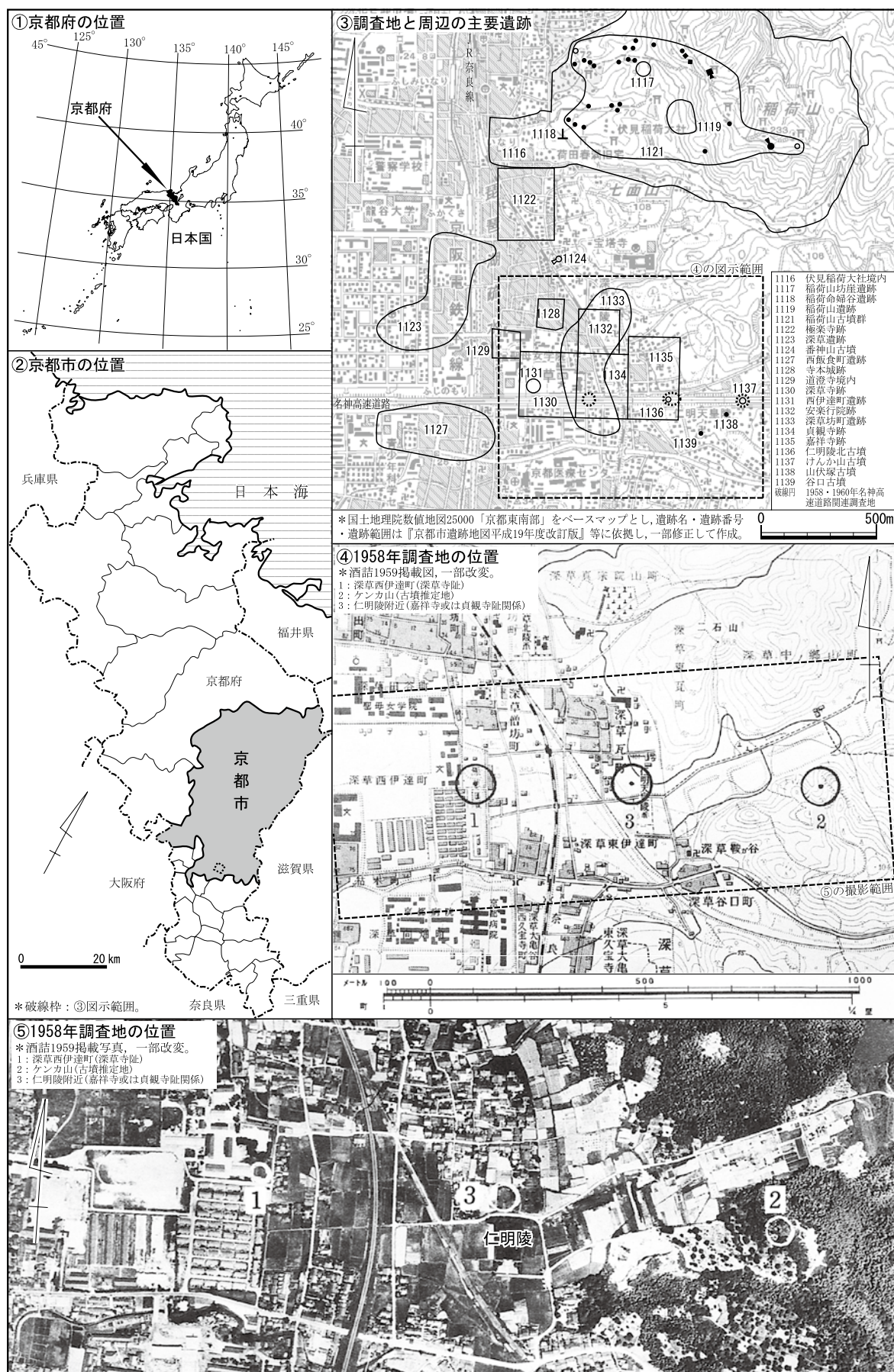


図1 調査地の位置(1)

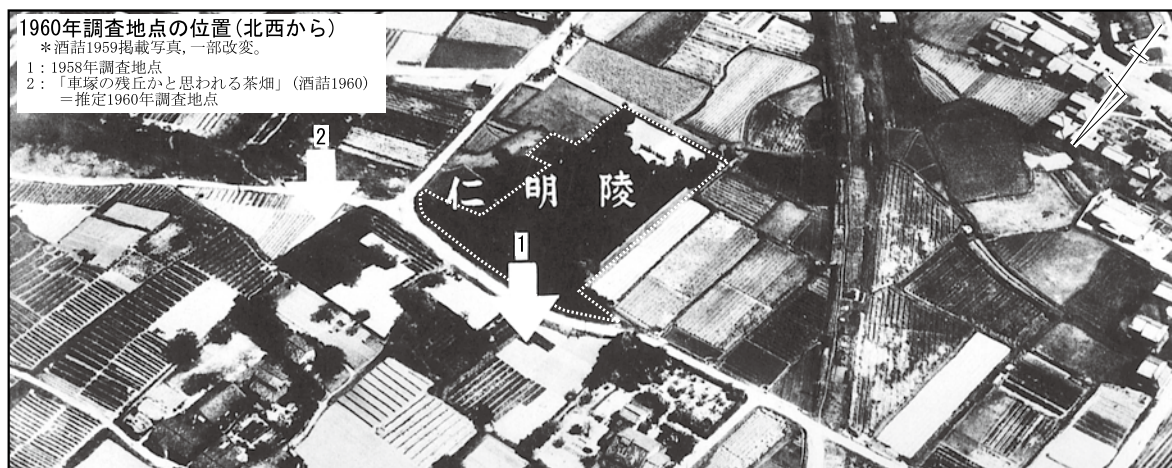


図2 調査地の位置(2)

調査地点の具体的な位置は仁明陵の北西側隣接地だったことが「概要報告」掲載写真から判読できる(図2-1)。また、「概要報告」によると、当初古墳の有力推定地と見こんでいた仁明陵北東側地点(図2-2)は土地買収の都合で調査できなかったという。そのためか、調査の結果、当初の目的であった寺院址・古墳は検出にいたらなかった。ただし、「概要報告」によると、「移動された土の中から、埴輪破片(中略)の破片数点が採集され」(p.23)ている。そこで、今回の資料調査では当該年の出土資料を探索したが、識別できなかった。

1960年の調査 翌1959年末には、昨年度調査できなかった名神高速道路計画路線中の「仁明陵北側地点」(図2-2)の土地買収が完了し、1960年1月4日～2月24日の間、この地点の発掘調査が実施された。当該調査の正式報告書は未刊である。しかし、調査直後の日本考古学協会第25回総会で調査経過の略報が発表され(酒誌他1960、以下「略報」)、同年には調査担当者の一人である波多野忠雄氏による調査速報も提示されており(波多野1960、以下「波多野報告」)、調査の一端を知りうる。ただし、「略報」と「波多野報告」との間には記述に齟齬がある。ここでは記述が詳細な「波多野報告」をおもに参考にして、埴輪の出土状況を跡づけたい。

〔調査区の配置〕調査は「東西南北に通る長い試掘溝を設定し、遺物や遺構のあらわれる状態を見て、次第に中心に向かって掘る方針」(p.33)で実施された。具体的には、南北方向の試掘溝(A・Bトレンチ)と東西方向の試掘溝(C・Dトレンチ)を設定し、これらが「囲む地区を四つに分けて、西北をA区、東北をB区、西南をC区、東南をD区とし、それぞれ調査がすすめられた。

〔埴輪出土状況〕「波多野報告」のなかから、埴輪にかんする記述を確認しておこう。

「(前略)Cトレンチでは、約三十糎の厚さに及ぶ黒褐色の有機質を混じた表層土を剥ぐと、砂質埴壤土(STL)から約五十糎の間隔を置いて一列に並んだ円筒埴輪(楕円との形象埴輪片を含む)の破片群が出て来た。それは東へ進むにつれて夥しい数量に達し、その配列は少し北へ曲がる徴候を表したが、この地層は隣にきた細礫を雑える黄灰色の壤質砂土(LFS)と急に代わったので、埴輪列は不定になり遂に消え果てた」(p.33)。また、Dトレンチで確認された「石敷き」が「BD両区を主としてA区やC区にも広が」(p.34)るので、「設備の意図と埴輪列との関係を求めるために各

トレンチを再び深く掘り下げたところ、専らCトレンチより無数の埴輪の破片が近世の瓦当の細片と混合して」出土し、また「Cトレンチの埴輪の序列は、攪乱層に包まれているのみならず、偶然にも茶株の根茎の配列と合っていて、その周りに恰も一個体の埴輪を感じせしめる様集っていた」(p. 34) という。そして、波多野氏は「(前略) 諸文献から推した古墳は、今回の発掘地域には遺っていない事がはっきり」するとともに、出土埴輪片が「この近くで生れた一基または複数の古墳の前に消え失せたか、或は現に残っている」(p. 34) 可能性を示唆するとした。

小 結 かぎられた記述からではあるものの、以下の諸点を確認することができる。

①埴輪はCトレンチを中心に出土した。

②埴輪の出土状況は、破片群が「約五十糎の間隔を置いて一列に並ん」でいた。

③埴輪は近世瓦と「混合して」出土した。

④埴輪は攪乱層につつまれ、また茶株の影響もうけていた。

このうち、②は古墳周溝内に埴輪が落ちこんだ状況を反映するとみる余地もあろう。しかし、後世の影響をうけた可能性をしめす③・④を考慮すると、その想定には容易にしがえない。やはり波多野氏が導出した解釈が現状では穏当とかがえる。

3. 埴輪資料の内容 (図3・4)

資料化の方針 本資料の分量はコンテナ6箱程度で、大半は図示しがたい小片であった。確認できた器種は円筒埴輪 (普通円筒埴輪・朝顔形埴輪)・形象埴輪 (家形埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪・石見型埴輪・人物埴輪・不明埴輪) である。以下、まず胎土・焼成・色調等の共通属性について記述したのち、器種ごとに内容を記述する。

【胎土・色調・焼成】胎土は直径1～3mm程度の石英・長石等の亜角礫を包含する例がおおい。色調は淡灰褐色から淡橙褐色を基調とする。焼成は無黒班土師質焼成である。

円筒埴輪 数量的に卓越するものの、いずれも破片であって、全形をうかがうにはいたらなかった。

【器 種】口縁部が確認できたので、普通円筒埴輪以外に朝顔形埴輪の存在がわかるものの、それ以外の部位では両者を区別できない例が大半をしめる。確実に朝顔形埴輪と判別できた破片を提示し、それ以外は普通円筒埴輪の記述のなかで一括してあつかった。

【朝顔形埴輪】二次口縁部の端部片 (1～3)、一次口縁・二次口縁境界付近の突帯片 (4) がある。1～3は端部付近をヨコナデで調整することで、外端面には凹みが生じる。この断面形状は普通円筒埴輪と共通する。外面は左傾ナナメハケで、内面はヨコハケで調整する。4は、突帯断面形状が低平な台形を呈する。この形状も他の胴部突帯と共通する。外面には左傾ナナメハケ調整をくわえる。内面はナデ調整を基調とし、一部にヨコハケをほどこす。

【普通円筒埴輪】すべて破片のため、全形・段構成をしりがたいので、部位ごとに記述する。

【口縁部】形態によって二つのグループに大別した。一つは、直立する口縁部の外端面付近に突帯を貼付するもの (5) である (口縁1類) (2)。もう一つは直立もしくは外反気味の口縁部で、

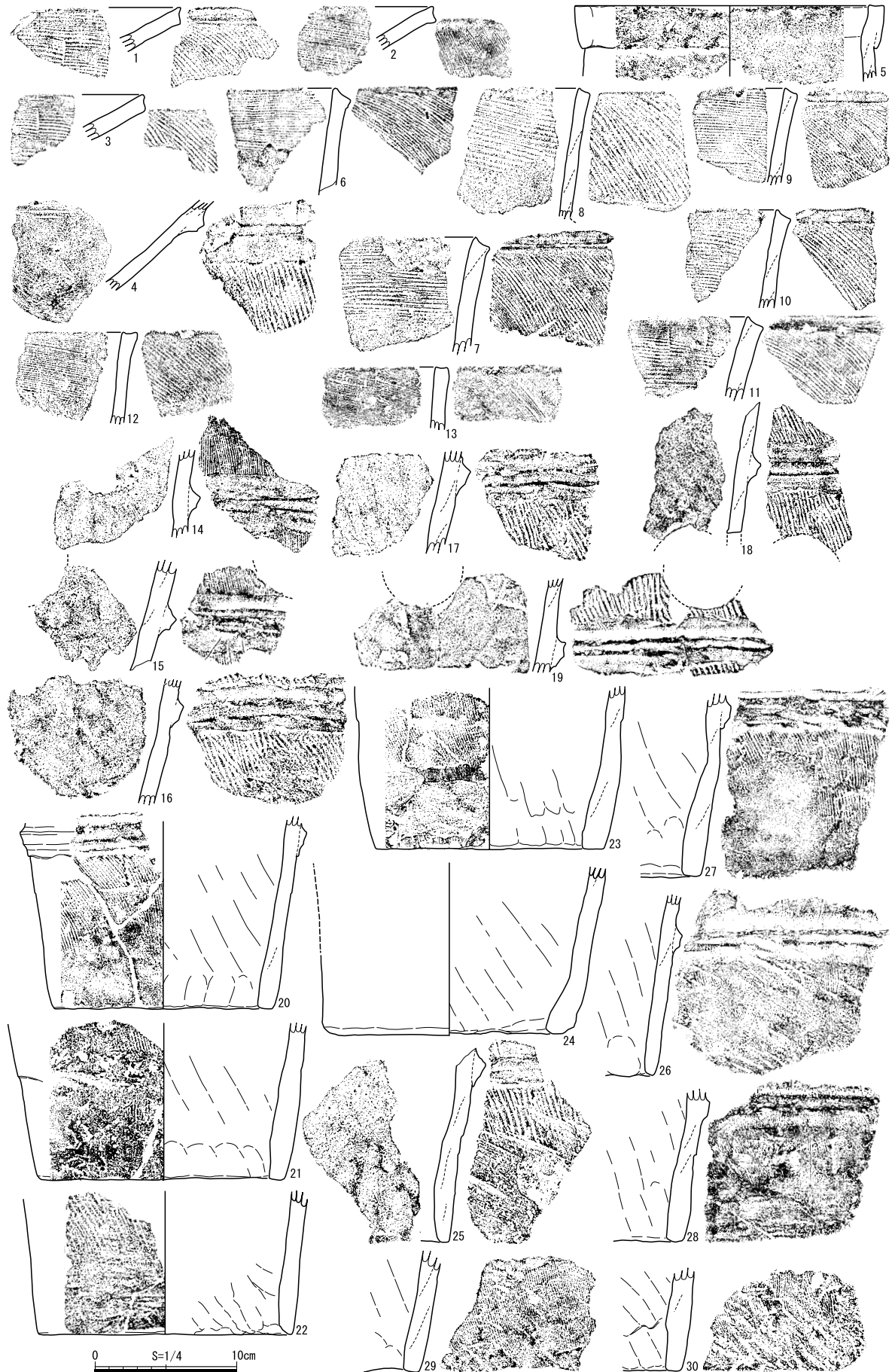


図3 埴輪実測図(円筒埴輪)

外端面付近に突帯をもたない一群（6～13）である（口縁2類）。量的にみると、口縁1類は1個体で、口縁2類が主体をしめる。口縁1類（5）は口縁端部外面に幅約3cmの低平な突帯を貼付する。突帯側面には、粘土帯を器面に押えつけたさいに生じた凹凸がのこる。外面は左傾ナナメハケで、内面はナデで調整したのち、上端部と内外面端部付近にヨコナデ調整をくわえる。口縁1類の器面調整は、外面を左傾ナナメハケで、内面をヨコハケで調整し、上端・内外面端部付近をヨコナデ調整する。

〔突帯部・スカシ部〕14～18は突帯部およびスカシ部の破片である。突帯断面形状は、上辺角部が下辺角部よりも突出する低平な台形を基調とする。突帯の貼付方式については、断続ナデA・B技法（川西1978、鐘方他1992）とも確認できなかった。15・18・19は、突帯をはさんで上下1段分が遺存する胴部片である。15・19は突帯の上段に、18は突帯の下段に円形スカシの一部がのこる。これらの胴部片の器面調整は、外面に一次調整としてタテハケをほどこし、内面は左傾ナナメナデによって調整することを基調とする。外面調整のタテハケは、ハケメ密度が粗い（2～3本/cm）一群と、細かい（約10本/cm）一群に大別できる。

〔底部〕底部高が高い（12.2～12.8cm）一群（20・25・27）と、低い（約10cm）一群（26・28）がある。底径は15.4～17.8cmに復元できる。突帯は、断面形状が低平な台形を呈し、台形の上辺角部が下辺角部よりも突出する点で胴部突帯と共通する。器面調整は、外面を左傾ナナメハケで、内面を左傾ナナメナデで調整することを基調とする。さらに、これらの外面下半に底部調整の板圧痕を確認できる例（20～23・25～30）と、確認できない例（24）がある。前者が量的に卓越し、後者は朝顔形埴輪とみるのが穏当であろう。底部調整については、板状工具端部の接面痕跡と目される左傾もしくは水平方向の段差が1段目外面に遺存し、それより下方は板状工具の接面によってハケメが不明瞭となる。一部に1段目突帯に板状工具が接触した例（26）もある。また、底部調整の板圧痕を確認できる例の場合、内面底端部側に接続するオサエ痕がしばしば確認される。これらは、板状工具の押圧時に内面にあてた指頭圧痕と目される。

形象埴輪 以下、器種ごとに記述をすすめる。

【人物埴輪】32は女子埴輪の袈裟状衣片である。粘土板をU字形に屈曲させた形態の破片であり、脇付近の袋状部分の一部に相当する。表面には、上下に直線紋をえがき、その内部に左行する綾杉紋を線刻して帯が表現される。表裏面ともにナデ調整される。31は小片のために確定しがたいものの、表面に32と類似した綾杉紋を線刻で表現しており、同一個体の可能性がある。

【石見型埴輪】34は形象部上段面の上辺部片で、表面にむかって上部の左隅付近に相当する。外面には、上辺と平行する上下2条沈線＋鋸歯紋を線刻する。内外面ともに器面はナデ調整される。35は形象部と円筒部の接続部付近の破片と目されるけれども、具体的な位置を確定しがたい。34と同様に外面には上下2条沈線＋鋸歯紋を線刻し、その下方に左傾する斜線を線刻でくわえる。表面の一部にタテハケメがのこる以外は、表裏面ともにナデ調整を基調とする。36は形象部中央帯の袂り部付近に相当する破片である。表裏面ともにナデ調整である。器面調整は、一面のナデが比較的丁寧である一方、もう一面は粗雑で、円筒と形象部との接合痕を確認できるほどであった。こう

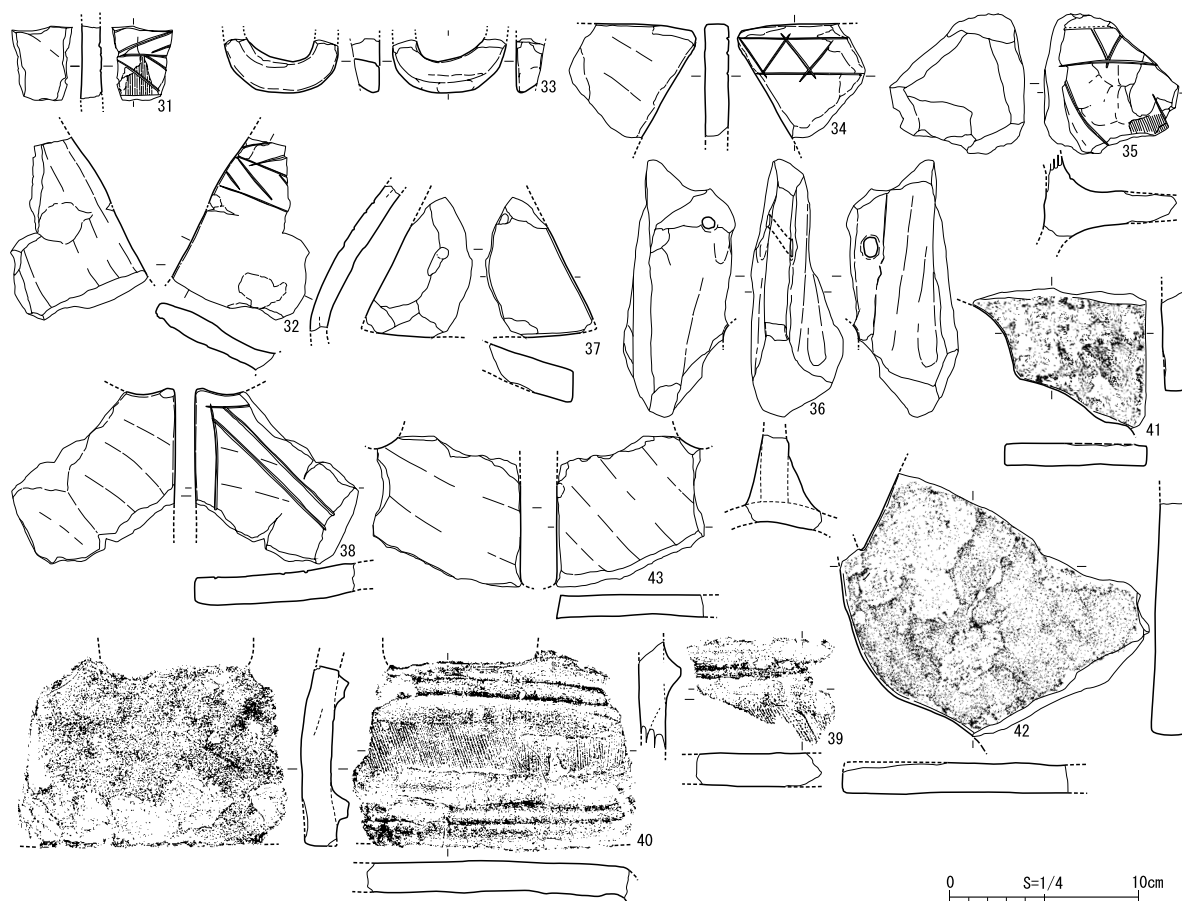


図4 埴輪実測図（形象埴輪）

した調整精度の相違によって、前者を表面、後者を裏面と判断した。また、小孔が表面側から裏面側へむけて傾斜して穿孔されている。円筒部破面で観察できた粘土紐接合痕は外傾接合なので、円筒部は倒立して製作されたとみて大過ない。33はU字形を呈する破片である。一側面には剥離痕跡がのこり、なにかに貼付されていたと想定できた。候補としては、馬形埴輪の障泥に貼付した鐙の一部、あるいは石見型埴輪の形象部上辺中央にあるU字状突起付近を想定できる。当初は前者とかがえた。しかし、これ以外に馬形埴輪の破片はなく、ひとまず後者として想定しておきたい。

中央帯付近の破片と目される36は無紋であり、34と組みあって上段面上辺のみに上下2条横線＋鋸歯紋のみをもつ個体を復元できる。類例として、長岡京市塚本古墳例（木村他1984）・木津川市音乗谷古墳例（高橋他2005）等がある。一方、35は相当する部分が確定できないものの、上下2条横線＋鋸歯紋以外にさらに文様を付加した別個体の存在を示唆する。

【盾形埴輪】38は盾面の破片で、表面にむかって上部左隅付近に相当しよう。上辺は水平でなく、山形をなす。表面には、外周にそって1条の沈線による区画をえがき、隅部から右下へむけて2条1対の沈線による直線紋をくわえる。器面は表裏面ともにナデ調整である。

【家形埴輪】39は突帯を貼付した板状品である。断面に曲率がないので、壁体部片とみた。外面は左傾ナナメハケによる調整、内面はナデによる調整である。突帯は断面三角形を呈する。40は壁体下部片と目される。板状品の外面上下に水平方向の突帯を貼付し、上部突帯の上端に接してスカ